

ドイツで開館した海外移民記念館について

— 出移民から見えてくること —

近 藤 潤 三

1. 海外移民に着目する意味

本年（2005年）9月11日に自民党の圧勝で終わった総選挙が行われたが、その1週間後の18日にはドイツで連邦議会選挙が実施された。両選挙とも現政権が解散によって国民の信を問うた点で共通しているものの、結果は一方が与党の圧勝、他方が与野党伯仲でCDU・CSUとSPDの大連立となり、鮮やかな対照が描き出された。日本と異なり、ドイツでは7年間続いたシュレーダー政権の終焉と政権交代が確実視されていたので、その模様を観察するために急ぎ足でベルリンなど各地を回ったが、この機会を利用して今年の5月と8月に開設されたばかりの2つの記念館を訪れることができた。

一つは国内で多年にわたり論議が続けられた末に国外からも注視を浴びながらスタートしたホロコースト記念館である。首都ベルリンの中心部に新設されたホロコースト記念館（正式名称は「殺害されたヨーロッパ・ユダヤ人のための記念館」という）については筆者も以前から成り行きに関心があり、昨年出版した拙著『統一ドイツの政治的展開』（木鐸社 2004年）でも若干言及した。また、その設置に至る経緯などに関しては城達也氏の詳細な論考が公表されており、落成式の模様などは木谷勤氏のレポートで興味深く取り上げられている。もっとも、それらは完成した記念館を見学する前に書かれているので、展示の内容と特徴には触れられていないが、その概要は同館のパンフレットから知ることができる。因みに、国外からの見学者が多いことを想定してパンフレットはいくつもの言語で用意されており、そのなかには日本語版も含まれている。交通の便のよい首都に所在しているのに加え、ブランデンブルク門から徒歩で

行けるという地の利のよさからいってもこれから現地で見学する人も多くなると予想されるので、ここで先回りして簡略な紹介をするのは不要であろう。それゆえ、むしろこれとは反対にひっそりと船出したもう一つの記念館について紹介しておくことにしよう。場所も不便であるうえ、少なくともわが国ではほとんど関心すら向けられてこなかったテーマに焦点を当てているために、足を運ぶ人は少ないと思われるからである。

その記念館とは、ブレーマーハーフェンで8月8日に開館した海外移民記念館、正式名称は「ドイツ出移民の家 (Deutsches Auswandererhaus)」のことである。略称としてしばしば「出移民博物館 (Auswanderermuseum)」という語が使われているので博物館と呼んでも間違いではないが、単に知見を広げるというのではなく、ドイツから大西洋を渡っていった海外移民の苦労を追体験し、深く結ばれている絆を意識化すると同時に、忘却に沈みがちな過去に思いを致すという性格が濃厚なので、やはり記念館と呼ぶのが適切であるように思われる。なお、ハンザ都市として栄えたブレーメンの中央駅のそばには大きな海外博物館 (Übersee Museum Bremen) があり混同されやすいが、同じ海外といっても、こちらは世界各地の民族のさまざまな生活様式を展示しているのに対し、前者はドイツからの移民に的を絞っているので、その性格は全く違っている。

ブレーマーハーフェンは鉄道の幹線から離れているし、今では目立った産業もないため、訪れる日本人は少ないであろう。しかしヴェーザー河の河口に位置する港町としてかつては賑わい、また、そこから多数の海外移民たちがドイツを後に未知の土地へと旅立っていったのである。けれどもその繁栄の面影は今日では見出しにくい。市の中心部は閑散としているように感じられたが、それはブレーメンとともにブレーメン州を構成している同市の失業率が市民の話では全国平均の2倍近い20%にも達し、州の財政も旧西ドイツ11州のうちで最悪という実情と無関係ではないであろう。

記念館は小さな中央駅からバスで10分ほどの海沿いにある。その場所はかつて海外移住する人たちが移民船に乗船したところである。近くには往時をしの

ばせる帆船が係留されているほか、第二次世界大戦中に建造されて戦後まで生き延びたUボートがつながれ、一般に公開されている。W.ペーターゼンの映画『Das Boot』で見たのとは大違いで、内部は極度に狭く、文字通り鉄の棺という表現がぴったりしている。記念館はそれらのある海岸通りに新築された白い帆を模したと思われる特徴のある様式の建物であり、徒歩で向かう途中に道を尋ねた何人かの市民は「堂々たる」とか「巨大な」建物ですぐに分かると誇らしげに教えてくれた。その言葉を鵜呑みにして、筆者の感覚で壮大な建物を探したためにかえってなかなか見つけられなかったのであるが。

海外移民記念館を訪れた日の夜、ブレーメンで経済学を教えている旧知の教授にそのことを話したら、実は自分の伯父もアメリカに移住したと教えてくれた。それを聞いて、筆者がボンで暮らしていた当時、親しくしていた初老の女性が、アメリカに移住した伯母を訪問したら、ドイツ語がおかしくなっていたと話してくれたのが思い出された。実際、彼らが口を揃えるように、出移民はドイツでは身近で起こるありふれた事象の一つに数えられるのであり、遠くの世界の出来事などではないとあってよい。現に今日でも毎年10万人から15万人ほどのドイツ人が国外に移住しているといわれている。そうした移住の結果、例えば野村達朗『「民族」で読むアメリカ』（講談社現代新書 1992年）や松尾式之『民族から読みとくアメリカ』（講談社 2000年）などではドイツからのアメリカ移民として600万人という数字が挙げられるほどになっている。しかし、このような数字にもまして、アメリカの社会主義と労働運動の歴史がドイツからの移民を抜きにしては語れない事実を想起すれば、大西洋を挟んで結ばれた移動のルートがいかに強固かが推し量れよう。

無論、ドイツからの出移民の移住先はアメリカに限られる訳ではない。『ハーメルンの笛吹き男』の伝承からだけでも、古くから東欧にドイツ語を話す集団の居住地があったことが分かるし、司馬遼太郎のベストセラー『坂の上の雲』を読めば、ロシア帝国の将軍や官僚など支配の中核にドイツ系の人々が少なからずいたことが推察できよう。そればかりか、ロシア革命以来レニングラードと称していた都市がソ連崩壊後に旧名に復し、今では再びドイツ風のサンク

ト・ペテルブルクと名乗っていることは、ロシア帝国の発展に対するドイツからの移民の貢献を物語る代表例の一つであろう。さらにアイヒマンがイスラエルの情報機関によって南米から拉致されたことにみられるように、ナチの中堅幹部たちが主に南米に逃亡したのは、各地に多数のドイツ系移民が居住していたからにはかならなかった。

これらの事例から、ドイツからの出移民がかなりの規模であることが推測できるが、事実、歴史を溯るなら、18世紀から19世紀にかけて移民の大波が生じていたことに気づく。今日のドイツで社会的時限爆弾と言われるアオスジードラー青少年は大半が東欧や旧ソ連諸国から両親に連れられてドイツに移住してきたが、彼らが特権的移民と見做され、一般の外国人とは異なる処遇を受けるのは、それらの地域へのかつてのドイツ移民の子孫だからにはかならない。そして彼らが社会的時限爆弾にまでなっているのは、無視できるような少数ではなく、逆にその数が多いからであり、そのことは歴史上の出移民が大量だったことを反映しているといつてよい。つまり、ドイツでは国外への移住は例外的もしくは周辺的な現象ではなく、むしろノーマルで中心的な現象だったのである。実際、移住によって人口問題の巨大な圧力が緩和されなければ、ドイツにおける近代国家の形成と発展は異なる歩みをたどっていたとも想像されるのであり、ドイツの近代は人口問題の爆発力を減殺するために国外への移住を必要不可欠な安全装置としていたのである。

ドイツでは昨年（2004年）7月に移民法が成立するまで長く政府が「ドイツは移民国ではない」という立場をとってきたので、ドイツに在住する移民は主として外国人として捉えられ、したがって彼らにかかわる問題は移民問題としてではなく外国人問題と認識されてきた。この角度からは、国外からドイツに入ってくる外国籍の人々ないしその家族までしか視野に入らず、ドイツ系の集団であるアオスジードラーが抜け落ちるという問題点が指摘できよう。しかしそれだけでなく、移民ならば入移民だけでなく出移民も存在するのは当然であることを踏まえるなら、外国人問題という捉え方からはドイツがかつては大規模な移民送り出し国だったという基本的事実が見えなくなる虞れがある。その

意味で、外国人問題という枠組みを突き破るうえで、海外移民に注目することの意義は極めて大きい。同時に、移民という現象ないし人の移動という事実がドイツ近現代史の一種の基本要素といえるところから、ドイツにおける「国民」「民族」とは何かを考えるうえでも、また人口問題に起因する社会的圧力が軽減されたことの意義を理解するためにも海外移民の存在に目を向けることが必要とされよう。こうした文脈でみると、わが国のドイツ研究でこれまで余り顧みられなかったこの分野には重要な研究蓄積があることに思い至る。オスナブリュック大学移民・異文化研究所のP.マルシャルクの手になる『19世紀の海外移民』（1973年）はこの面での基本文献であり、人の移動を歴史的に鳥瞰した同研究所のK.バーデ『運動の中のヨーロッパ』（2000年）は英語、フランス語、イタリア語、スペイン語にも翻訳され、既に古典の地位を占めている。一方、わが国では桜井健吾『近代ドイツの人口と経済』（2001年 ミネルヴァ書房）特にその第3章「ドイツ人の海外移住」が先駆的な研究であり、拙著『統一ドイツの外国人問題』（2002年 木鐸社）でもアオスジードラーなどと併せて触れている。

2. 海外移民記念館の展示の概要

ところで、このような観点を別にしても、海外移住が何百万ものドイツ出身の人々の生涯を左右したことからすれば、海外移民を主題とする記念館や博物館のような施設がこれまで存在しなかったことの方がかえって不思議に思われるほどである。その意味では今回開設の運びとなった海外移民記念館の建設は遅きに失するとの感を拭えない。同館のパンフレットによれば、同館は海外移民をテーマとしたヨーロッパ大陸で最大の体験博物館であり、ドイツで最初の移民博物館でもある。場所としてブレーマーハーフェンが選ばれたのは、1830年から1974年までに700万人以上の海外移住者がブレーマーハーフェンから大西洋に船出していったからである。建設を求める声が上がったのは1980年代半ばであり、1985年に30人ほどの職業的研究者などによって結成されたドイツ海

外移民博物館期成連盟が口火を切った。最初はブレーマーハーフェンに海外移民に関する情報センターを開設することが要望されていたが、考慮されていた建物が手狭で場所にも問題があったために計画は進捗しなかった。しかし1995年になって2000年に予定されたハノーファー万博に合わせてコロンプス駅に海外移民博物館を設ける構想がブレーメン・メッセ会社から提起されたのを契機に計画が動き出した。その後、名称、建設場所が何度か見直され、同じブレーマーハーフェンにある航海博物館に付設する案が出たり、市内の企業が委員会を設置して支援に乗り出すなどの曲折があったが、見学者がさまざまな段階での海外移民の経験を情緒的に追体験できる「体験世界」とするという2001年にA.ヘラーが出した構想を基にして2003年12月によく骨格が固まった。そして翌年4月に市当局が同意して10月に着工し、2005年8月8日に開館に漕ぎ着けたのである。建設には財政難に喘いでいるブレーメン州とブレーマーハーフェン市が共同で約2000万ユーロを負担し、運営に当たる団体に建物を賃貸する形をとっている。そのため入館料が必要であり、成人は8.5ユーロ、4歳から14歳までの子供は6ユーロと無料も少なくないドイツの施設の中ではかなり高くなっている。落成の式典には海外移民の祖父をもつシリー連邦内相のほか、アメリカ、オーストラリアなど移民受け入れ国の大使が列席したのは、この記念館に相応しかったといえよう。

海外移民記念館の総面積は3500平方メートルというから記念館としては比較的大きい。順路に沿って紹介すると、まず入館する際にテレホン・カードのようなプラスチックのカードを渡される。展示などの詳しい解説を聞きたいとき、その場で装置に挿入すれば説明が受けられる仕掛けである。これを手にして見学者は館内を回るが、最初のスペースでは丹念に調べあげられた何人もの海外移民の来歴や移住の動機が語られる。移住の理由は多種多様であり、冒険心からというケースもあれば、ユダヤ系の市民のように迫害から逃れるためという場合もある。また、貧困や飢餓から脱するという抜き差しならない理由がある一方、政治的自由の渴望という理想主義に基づく自由な選択というものまで多岐にわたっている。

最初のスペースでそうした理由を聞き終わると次のスペースへのドアが開き、薄暗い階段を上ることになる。すると見学者は夜の波止場いきなり出る。煉瓦造りの倉庫を背にして見送りの人々が立ち並び、移民船ラン号が大きな荷物をさげた移住者たちをのせていまにもブレーマ―ハーフェンを出港する光景である。ランタンの薄明かりで岸壁と船体との間の狭い海面が鈍く光り、デッキに並ぶ移住者のかすかに照らし出された表情がいかにも不安げに見えるのは、巧みな演出といってよい。ついでながら、使われている海水は本物とのことである。

そこを過ぎると「700万人のギャラリー」に出る。そこでは実物の移住許可証などが展示されているほか、移住者の膨大なカードを収めた引き出しが広い壁一面に並んでいる。カードには出生地、職業、出港日など移住者の個人情報書き込まれており、詳細が明らかになっている3000人ほどの人々についてはその人生を辿ることができる。例えば、1847年に18歳で家族とともにブレーマ―ハーフェンからアメリカに旅立ったレブ・シュトラウスはジーンズを発明してアメリカン・ドリームを実現させ、リーヴァイスとして、あるいはレヴィ・シュトラウスとして後世に名を残したが、彼の成功の陰には夢に破れた無数の敗残者がいた。彼らが故郷を捨てた理由は一様ではないので、移住の動機に関心のある人にはこのスペースは立ち去りがたい場所であろう。ここで見出される行き届いた調査に感心させられるのは決して筆者だけではないであろう。ドイツの同種の施設ではしばしば調査の徹底ぶりに驚嘆させられるが、海外移民記念館もその一つとして新たに加わった。

次のスペースでは19世紀半ばから20世紀前半にかけての3つ時期の移民船の内部が再現されている。説明によれば、19世紀半ばの帆船ではニューヨークまで5週間を要したが、20世紀の20年代になると僅か5日に短縮されたという。しかし強い印象を与えるのは、大西洋を横断するのに要した時間ではない。19世紀の帆船では移民たちは蚕棚のような板の上の藁のマットに身を横たえて時を過ごし、窓もない窮屈で劣悪な居住環境に耐えなければならなかった。それはまるで奴隷船か強制収容所のような観さえ呈している。これに対し20世紀にな

ると様相は一変して船室はホテルの部屋のような感じさえ与え、快適さが格段に増している。蛇口をひねれば流れる水、室内の清潔なトイレがそれを示す例である。展示されているのは3等船室ということであるから、そうした違いは船室の等級を考慮に入ればさらに大きくなると思われるが、残念ながらその点までは確かめることはできない。

ともあれ、こうしてブレーマーハーフェンを出発してニューヨークに到着すると、移住者たちはエリス島で移民の審査を受けることになる。海外移民記念館では船内に続くスペースにそのエリス島の審査場の様子がそっくり再現されている。審査では移住者たちは身体から思想まで徹底的に調べられたとされている。身体検査に加え、一夫多妻主義か、アナーキストかなどの思想調査が行われ、問題があると判断されると即決でアメリカへの入国は拒否され、大西洋を再びヨーロッパへ向けて帰らなければならなかった。このスペースでは見学者は自分で審査を体験することができ、答えに窮すると「入国不可」の判定を受けることになる。ただここでもアメリカ側の移民労働力に対する需要の大きさや、社会主義から受ける脅威感の強度などが時期によって異なることを考えると、移民に対する審査の厳格さがいつも同じだったかどうかという疑問が残る。

エリス島を過ぎて入っていくのは、「子孫の間」と名付けられたスペースである。ここでは移民たちがどこに定住したかが地図で表示されている。また同時に、その子孫たちが現在ではどのように暮らしているかが見学者自身が自分で調べられるように膨大な量のアメリカの電話帳が備えられている。そしてこのスペースで現代にたどり着き、最後の映写室でアメリカで現在暮らしている移民の子孫が登場する短いフィルムを観賞して海外移民の過去を辿る順路は終点に達することになるのである。

3. 海外移民記念館の意義と若干の問題

ブレーマーハーフェンに新設された海外移民記念館では、以上で概要を紹介した展示が行われている。それを見れば、見学者が対象に一定の距離を保ちながら観察する従来型の施設とはかなり違っていることは明らかであろう。そこでは見学者が海外移民の世界に入り込み、その苦労を追体験するように設計されており、「体験世界」というアイデアが随所に生かされているからである。このような特色は開館したばかりのホロコースト記念館をはじめ、ドイツ国内の各地にあるさまざまな記念館には見出されないものであり、海外移民記念館に特有のものといってよいであろう。見学者を対象の中に引き込み、一時的ではあれ希望や苦悩を共有させるというそうした構想は貴重であり、十分に評価する必要がある。

けれどもその反面、対象自体の、したがってここでは海外移民という出来事の社会的文脈が希薄になる恐れがあることも指摘しなければならない。例えば19世紀半ばに劣悪な船室の移民船で大西洋を渡った移住者たちがドイツを去ったのは、資本主義形成期の大量貧窮のような社会的背景があったからだが、移住者一人一人のカードを見るだけではその状況は浮かび上がってはこない。したがって、そうした側面の展示も必要だと筆者には考えられるのだが、それが欠けているのは、移民の苦難を単なるエレジーに終わらせてしまう結果になるのではないだろうか。同様に、エリス島での移民の不安は追体験できるものの、アメリカが積極的に移民を受け入れた事情や抑制に転じた背景を提示しなければ、これも移民の苦労の一つというエピソードで片付けられてしまうのではなからうか。そうだとすれば、せつかく海外移民の記念館という企画がドイツの歴史の重要な一面を照らし出し、国民国家としてのドイツの成り立ちを顧みる場を提供しているのに、その効果が減殺される結果になるように感じられる。さらに無い物ねだりを付け加えれば、多数の知識人やユダヤ系市民がナチスの政権掌握後に亡命の途に就いたことに関して特別な展示が欠落しているのも惜しまれる。この人々の中には作家のトーマス・マンをはじめ、物理学のアイン

シュタイン、フランクフルト学派の総帥アドルノとホルクハイマー、女優のマレーネ・ディートリヒなど著名な人物が数多く含まれており、戦後のアメリカとドイツの知的交わりを理解するうえで欠かせない一章になっているばかりでなく、大量の亡命者の存在はナチ支配の重要な一面でもあるからである。またこのテーマに光を当てることは、亡命者が移民の一つのカテゴリーであることを把握するのに資するであろうし、ドイツを去ったのが労働移民だけではなくたことの確認は、ドイツ史にアプローチする視座を広げるのに役立つであろう。なお、ナチ・ドイツから逃れアメリカに渡った亡命者の苦勞と苦悩については、一例として、トーマス・マンとその息子で自殺したクラウス・マンを主人公にし、国内残留組との軋轢を掘り起こした山口知三『廢墟をさまよう人びと』（人文書院 1996年）で克明に描かれていて参考になる。

以上で指摘したような問題点が見出されるとしても、それによって海外移民記念館の意義が減じられるわけではない。とくに事実上の移民受け入れ国になっているにもかかわらず、最近まで「ドイツは移民受け入れ国ではない」という立場を政府が崩さず、ドイツは原則的に移民とは無縁な国であるかのような見方が有力だったことに鑑みれば、膨大な数のドイツからの出移民がドイツを立ち去ることによって近代から現代に至るドイツの歴史を背後から形成してきた事実思いを致すことは極めて意義深いであろう。そればかりでない。移民法の制定によって移民政策の路線転換が進められつつある現在、多数の事実上の移民が外国人として暮らすドイツが出移民という点でも移民の国であるという事実を直視する場ができたことは、まことに時宜に適っていると思えるのである。

なお、蛇足ではあるが、ベルリンのドイツ史博物館で本年（2005年）10月22日から来年2月12日まで移民をテーマとする展示が行われていることも付け加えておきたい。この展示は、11月9日付『フランクフルター・ルントschau』紙でT.メディクスも指摘しているように、本年1月の移民法の施行に合わせた企画であることがあまりにも明白である。その上、現代ドイツにおける移民問題の重大さに照らした場合、遅まきと形容できる段階を通り越しているとの印

象を拭うことはできない。しかし、逆から見れば、首都ベルリンに位置する国立の歴史博物館が移民という現象に焦点を当てたことは、この問題がようやくドイツ史の中心テーマの一つとして公認され、片隅の位置から脱したことを意味しているとも考えられる。その展示の中では、当然ながら、長い歴史をもつ入移民ばかりでなく、ドイツからの出移民の歴史にも光が当てられている。また、期間中に上記のバーデのほか、同じオスナブリュック大学に所属するオルトマーなど幾人もの移民研究者の講演も予定されており、さまざまな角度からアプローチする工夫がなされている。こうした企画により、移民が現代だけの問題ではなく、同時にまた、入移民だけの問題でもないことへの認識が深まることが期待される。いずれにしても、ドイツ史博物館の展示が海外移民記念館の開設と時期が重なっていることは、移民法の成立によって移民政策が転換し、新たな段階に入ったことを背景にして、移民問題に対する社会の関心の高まりを反映しているといつてよいであろう。

4. わが国との比較

ここまでドイツの海外移民に焦点を当てながら、そこに視点を据える意義を考えてみたが、わが国にも海外移民の歴史があるのは周知のとおりである。日本の海外移民といえば、すぐに想起されるのはハワイやカリフォルニアなどのアメリカ移民や、ブラジルをはじめとする南米移民であろう（鈴木讓二『日本人出稼ぎ移民』平凡社 1992年）。またこれには敗戦前後の悲劇とともに語り継がれてきた満州移民のほか、植民地だった朝鮮半島や台湾に移住した人々などを付け加えることができよう（若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社 1995年）。これらの移民は現地で生活基盤を築くまでや、戦火を逃れ日本に引き揚げる過程でそれぞれ筆舌に尽くしがたい苦難を嘗めた。また戦後、政府の主導で再開された移民の送り出しも、それを担った国際協力事業団に勤務し、南米移民の実務に従事した若槻泰雄が『外務省が消した日本人』（毎日新聞社 2001年）で自責の念を込めて告発しているように、文字通り典型的な棄民政策

にほかならなかった。その実態は、石ころだらけの土地に置き去りにされたドミニカ移民の人々が粘り強く続けている裁判闘争でも明るみに出されているが、その苦渋は決して彼らに限られていなかったといわねばならない。

わが国の場合にも過去にこのような出移民の波が存在したが、ドイツの海外移民はそれを大きく上回る大量現象として生じ、また長期にわたっている点が異なっている。出移民にせよ入移民にせよ移民がノーマルな現象だというのは、ドイツでは普通の市民の身近で生起していて、国民の構成や社会の在り方がそれによって直接・間接に規定されていることを指している。上記のバーデとオルトマーが近著に『普通のこと・移民』（2004年）というタイトルをつけたのも、そうした状態を念頭に置いているからにほかならない。これに対し、わが国で出移民の存在が広く意識されるようになったのは、1990年の入管法の改正以後、ブラジルを中心とする南米出身の日系人の就労が増えたことを契機としている。逆にいえば、それまでは日本から出て行った移民はほとんど忘れられた存在であり、すくなくとも圧倒的多数の市民にとっては出移民を身近に感じるものがなかったといっても過言ではない。この意味でドイツの海外移民と日本のそれを単純に同一視するのは適切ではないと考えられる。

他方、入移民に関しては、規模の大きさや労働力として不可欠な存在になっていることなどから、その存在を抹消したドイツはもはや想像できず、ドイツでの重みは日本より格段に大きくなっている。この点は既によく知られているが、そのさまざまな帰結については広く理解されているとはいえない。例えば今回のドイツの連邦議会選挙でもその一端が浮き彫りになった。というのは、今次選挙でSPDとCDU・CSUは予想に反して接戦を演じたが、こうした事態が続けば移民票が選挙の行方を決定づける可能性が高まり、その取り込みを巡る競争が起こると考えられているからである。実際、1967年以降に約400万人がドイツに帰化したか、そのうちで有権者がどれだけいるにせよ、今回のドイツ全体の有権者総数6190万人に占める割合は決して小さくないし、選挙が接戦になれば重みが増えますます大きくなるのは当然といえよう。推定ではトルコ系の有権者は現在60万人程度だが、専門家はそのうちの80%はSPDか緑の党を支持し

ていると見ており (Frankfurter Allgemeine Zeitung vom 15.9.2005)、新聞報道によれば、前回2002年の連邦議会選挙では60%がSPDに投票し、CDU・CSUに票を投じたのは12%に過ぎなかったといわれる (Integration in Deutschland H.3/2005,S.3.)。シュレーダー首相が選挙戦中に移民の利害に格別の考慮を払ったと指摘されるのは決して誇張ではないし、偶発的なことでもないのである。ドイツでは二つの国民党の得票率の差がかつてのように明確に開くことは考えにくくなっているが、それだけに移民票をつかむことが勝敗を分ける公算が高くなると思われるのであり、移民国ドイツはそうした事態をも引き受けなければならないのである。

入移民にせよ出移民にせよ、ドイツにおける移民の規模と政治や社会への影響はこのように日本より格段に大きいばかりでなく、歴史的にもドイツは移民を抜きしては語れないが、そうだとすれば、移民問題をテーマにして両国を比較する場合、そうした側面に留意した慎重なアプローチが必要とされよう。これはドイツに限らず、他の国々の移民に関する経験から学ぶ際には常に当てはまることであり、それぞれの国の歴史や社会の文脈の中で問題を捉えることから始めることが求められる。この意味で、本稿で紹介したブレーマーハーフェンの海外移民記念館は、出移民という記憶の片隅に追いやられがちな移民史の半面を鮮やかに浮かび上がらせている点で貴重な施設だと思われるのである。

参考文献

- 明石紀雄・飯野正子『エスニック・アメリカ』有斐閣 1997年
木谷勤「ベルリン・ホロコースト記念碑 (警鐘碑) をめぐり思ったこと」ドイツ現代史研究会ニューズレター4号 2005年10月
近藤潤三『統一ドイツの外国人問題』木鐸社 2002年
同「ドイツにおける移民法の成立過程」『社会科学論集』(愛知教育大学) 42・43号 2005年
桜井健吾『近代ドイツの人口と経済』ミネルヴァ書房 2001年
城達也「統一ドイツのナショナル・アイデンティティの形成」中久郎編『戦後日本の中の戦争』世界思想社 2004年

- 野村達朗『「民族」で読むアメリカ』講談社現代新書 1992年
- 松尾式之『民族から読みとくアメリカ』講談社 2000年
- 山口知三『廃墟をさまよう人びと』人文書院 1996年
- Willi Paul Adams, Deutsche im Schmelztiegel der USA, 3.Aufl., Berlin 1994
- Klaus Bade, Europa in Bewegung, München 2000
- Klaus Bade und Jochen Oltmer, Normalfall Migration, Bonn 2004
- Deutsches Historisches Museum, Zuwanderungsland Deutschland: Migrationen 1500-2005 (<http://www.dhm.de/ausstellungen>)
- Förderverein Deutsches Auswanderermuseum, Bremen und Bremerhafen als Auswandererhäfen, Bremerhafen 1988
- Ralf Hanstelle, Vertraute Fremde - Europa ist ständig in Bewegung, in: Das Parlament vom 14.11.2005
- Walter Kamphoefner, Peter Marschalck, Birgit Nolte-Schuster, Von Heuerleuten und Farmern, Osnabrück 1999
- Peter Marschalck, Überseewanderung im 19.Jahrhundert, Stuttgart 1973
- Thomas Medicus, Anständiger preußischer Hugenotte, in: Frankfurter Rundschau vom 9.11.2005
- Stefanie Mühlheims, Reise ins Ungewisse, in: Der Stern vom 27.8.2005
- Eckhard Stengel, Das Glück in der Ferne begann mit Entbehrung, in: Das Parlament vom 4.10.2005